

〔論 文〕

# アイリーン・コルウェル 1904-2002

## ——ある児童図書館員の肖像——

藤 野 寛 之

### I はじめに

イギリスにおける児童図書館ならびにそこでのストーリーテリングの開拓者として知られるアイリーン・コルウェル (Eileen Colwell, 1904-2002) には、96歳になって書いた、率直で見事な自伝『むかしむかし……』<sup>1)</sup>がある。これは児童図書館の創設期の物語としても、著者の長年にわたる友情の日々の記録としても、児童図書館員必読の書の一冊であるが、そこには詩人としてのコルウェルの見事な文章を見ることがもできる。

### II 生い立ち

アイリーン・コルウェルは1904年6月16日にヨークシャー州の東海岸ロビン・フッズ・ベイで生まれたが、3歳のころにはメソジスト教会の牧師であった父の次の任地に伴われて行かねばならなかった。当時のきまりとして、一家は3年もしくはもっとしばしば、父の任地を移動せねばならなかった。こうして彼女は、ストラットフォード・オン・エイヴォン、ウィルトシャー州の炭鉱町、ダラムなどのさまざまな地で幼年・少女時代を過ごした。10歳のころの彼女の楽しみは週に一度、本屋に行くことであったという<sup>2)</sup>。父は非国教会派の牧師で、信念の人であった。詩人であり、読書家であった父の影響は娘アイリーンに伝えられた。のちに彼女は「物心ついて以来、私は、ひとに話を聞かせることが大好きでした」<sup>3)</sup>と語っているが、説教で暮らす父の弁舌のさわやかさもこの娘に影響していたと思われる。母は情熱の人であり、大

家族での両親の専横を嫌い、家を飛び出して、教区牧師のコルウェル師と結婚した。メソジスト教会のしきたりとして、牧師は6年経たねば結婚が許されず、このため夫妻は、結婚してからの4年間は給料が独身者並みであり、家庭に経済的な余裕はなかった。アイリーンの上に姉と兄がおり、彼女の下には1歳3か月違いの妹がいた。日曜日になると母は挿絵の入った聖書をアイリーンに読み聞かせていたという<sup>4)</sup>。両親の影響もあって本が大好きな彼女は子どもの頃、探検家を夢見ていたこともあった<sup>5)</sup>。

### III ロンドン大学での学び

教区を巡回して、学校での友達が少なかったかわりに、各地域の貧しい家庭の訪問で子どもの世界を知ったコルウェルは、子どもと本の世界に入ることを志すようになったが、当時はその場がほとんどなかった。父が広告で見つけてくれた、新設のロンドン大学の図書館学校が目的にかなっていると思い、ヨークシャー州の奨学金に応募し、それを獲得、メソジスト派の寄宿舎に住むことができ、彼女は1921年に図書館学校に入学した。それは、同時に父と母の離別の時期でもあった。母は妹ヴェラを連れて父から独立し、働きながら生活をたてた。アイリーンは父にも母にも頼ることはできず、乏しい奨学金の範囲内で暮らし、郊外の寄宿舎から大学まで歩いて通った。この間に知り合ったウェールズ人学生から恋文をもらったこともあった<sup>6)</sup>が、戦時期のことであり、彼女には勉学と将来の職業以外には目が向かなかった。アルバイトで働いたフルハム図書館では、午前と夕方から

の勤務で、昼間の時間が空いていたが、この間に時間をかけて寄宿舎に往復することができず、暖房のある映画館で過ごしていたという。なお、ロンドン大学では『児童図書館マニュアル』を執筆したクロイドン公共図書館長セイヤーズ<sup>7)</sup>から直接教えを受けている<sup>8)</sup>。

#### Ⅳ ボルトン公共図書館での活動

1924年、20歳になったコルウェルは、ランカシャー州の工業都市ボルトンの公共図書館に勤めることになった。年給は80ポンドで、何とか一人暮らしはできたが、望んだ児童図書館の担当にはならず、市民への貸出図書館の担当であった。2年間勤務した後、図書館雑誌の広告で募集していたロンドンのヘンドン図書館の臨時職に応募して合格した。ボルトン図書館の館長に伝え、彼は常勤職を捨てて臨時職を希望する相手が理解できなかった。しかしヘンドン図書館の職は児童図書館の開設にかかわるものであった。

#### Ⅴ ヘンドン公共図書館での活動： (1) 戦前

1926年9月に、ロンドン北郊のバーネット地区ヘンドンの図書館で児童図書コレクションの開設準備に着手したコルウェルは、勤務時間外も働き、翌年1月にはその開設にこぎつけた。イギリスにおける児童図書館サービスのほぼ初めての実験であったが、その試みは成功し地区の子どもたちの人気の的となり、最初の一年で貸出図書は2万5000冊、2年目にその数は6万5000冊となっていた<sup>9)</sup>。カーネギーの寄付によって建てられた中央図書館も、その後開館、コルウェルは児童部門の責任者となる。彼女は利用しにくる子どもたちに図書館の貸出を手伝わせた。石井桃子<sup>10)</sup>もその点について「それまでの図書館で見たことのない光景であった」と述べている<sup>11)</sup>。12歳の時にコルウェルの「小さな助手」となったグレニーズ・サルウェイは『95

歳祝賀記念文集』のなかでそこで得た経験を次のように記している。

「なんといっても一番よかったのは、利用者への丁寧な接し方や本についてのいろいろな知識をコルウェルさんから学んだことでした。そしてもちろん、ストーリーテリングについても学びました。」<sup>12)</sup>

成功の評判は広がり、見学者も増えた。

1931年にはヘンドンの自分の住まいを持つことができたが、母は自活をつらぬき、ヨークシャーで家政婦をして暮らしていた。しかし、第二次世界大戦がはじまり、娘と同居することになるが、ロンドンも空爆の対象となり、ヘンドン地区にも1000発ばかりの爆弾が投下されて、市民は防空壕に避難せねばならなかった。家が爆撃で破壊され、コルウェルが友人と下宿に移ると、田舎に疎開していた母は1941年に亡くなった。一生を苦勞して生きた母はヘンドンで葬られた。1953年に同居していた友人がコルウェルの兄と結婚することになり、独立してアパートに住むこととした。再婚していた父は、戦後の1954年にコーンウォールの引退先で亡くなり、コルウェル姉妹はその葬儀に参加した<sup>13)</sup>。

#### Ⅵ ヘンドン公共図書館での活動： (2) 戦後

こうした間、ヘンドンの児童図書館もコルウェル自身も活気につまれていた。第二次世界大戦後には児童図書の出版が盛んとなり、質の劣る本も出ていた。古典と挿絵を重視する彼女の選書方針は図書館界で歓迎され、大戦中も欠かさず続けた<sup>14)</sup>ストーリーテリングも評判が高かった。イギリス図書館協会の児童図書賞、カーネギー・メダルが創設されたのは1937年であった。すでにアメリカではニューベリー賞が、フランスでは若者賞ができていたが、イギリスでは図書館協会に予算がなく、賞はカーネ

ギー<sup>15)</sup>の生誕100周年を記念して設定された。その第一回の受賞者はアーサー・ランサム<sup>16)</sup>であった。すでに1937年にセイヤーズの勧めで取り組んでいた児童図書館協会も、戦後の1946年には、図書館協会の支部「若者図書館グループ」となり、さまざまな企画においてコルウェルはその代表者となっていた。1955年に発足した、イギリスの挿絵画家を対象とするケイト・グリーンハウエイ賞もコルウェルが中心人物の一人となっていた。挿絵画家の場合、その国籍の判定で議論は難航したが、第一回の受賞者はエドワード・アーディゾーニ<sup>17)</sup>であった。

## VII ヘンドン公共図書館での活動： (3) 国際的な場面での活動

1957年にはハンス・クリスチャン・アンデルセン賞という国際的な児童図書賞の選考委員を委嘱された。この賞は、1946年にミュンヘンに設立された国際児童図書館の創設者であるドイツ生まれ、イギリス国籍のイエラ・レップマン<sup>18)</sup>が提唱したもので、イギリス代表の委員としてコルウェルが選ばれた。第一回の受賞者はエリナー・ファージョン<sup>19)</sup>で、その後はドイツのエーリヒ・ケストナー<sup>20)</sup>、スウェーデンのアストリッド・リンドグレーン<sup>21)</sup>、イギリスのパメラ・トラヴァース<sup>22)</sup>が選ばれていた。こうした賞の選考の内幕には各国の利害が対立したようで、コルウェルの自伝にはこのあたりの実情が率直に記されていた。なお、エリナー・ファージョンとは親しくしていたようで、石井桃子がロンドンに来たさいに一緒に家を訪問している<sup>23)</sup>。

ウェストミンスター公共図書館長で国際図書館連盟(IFLA)の副会長であったライオネル・マッコルヴィン<sup>24)</sup>に依頼されて、コルウェルは1955年の連盟総会で児童部会の設立を提案する役割を担い、児童部会が発足した。1950年代から1960年代にかけて、彼女は国際的な場面でも活躍した。1956年アメリカのストーリーテリング・フェスティバルに参加、1961年にはトロ

ント公共図書館の少年少女の家<sup>25)</sup>で開かれた国際ストーリーテリング・フェスティバルにも招かれていた。さらに、1963年にはブルガリア、1964年にはイタリアに赴き、児童図書館の運営を指導し、ストーリーテリングの実演を披露した。

こうした時期には、当然、イギリスおよび世界の多数の児童作家や図書館員に出会っていたが、コルウェルの自叙伝に描かれるこれらの人物像は、的確で彼女の誠実な人柄もしのばれるものであった。作家のジョン・メイスフィールド<sup>26)</sup>、エリナー・ファージョン、ピアトリクス・ポター<sup>27)</sup>、石井桃子、図書館員のリリアン・スミス<sup>28)</sup>などの姿は一読に値する。人物を的確に捉える能力は、彼女独自のものであった。

## VIII 執筆者としての一面

忙しい中、コルウェルは執筆にも取り組んでいた。最初に書いたのは自伝的な『わたしはいかにして図書館員になったか(How I Became a Librarian)』であったが、ヘンドンでの図書館創設の苦心が語られており、1956年に出版されたこの本はやがて日本語に翻訳され(『子どもと本の世界に生きて』)好評を博し、オランダ語版も出版された。これ以後、自叙伝を除き、彼女は生涯に25冊の本を刊行することになる<sup>29)</sup>。1961年に刊行した評伝『エリナー・ファージョン』は1988年には日本語訳が刊行された。実務関係では、1980年に公刊した『ストーリーテリング』が評価され、1991年には改訂版が、1995年にはその日本語版『子どもたちをお話の世界へ：ストーリーテリングのすすめ』も出版されていた。

## IX 教育者としての一面

1967年、コルウェルはヘンドン図書館での熱心な引きとめを辞退して引退し、レスターシャー州ラフバラ大学の図書館学科に専任講師として赴任した。ヘンドン図書館はコルウェ

ル引退時には、20の児童図書館と150の学校図書館を担当するまでとなっていたという<sup>30)</sup>。ヘンドンでは、300人の児童がコルウェルを送り出した。彼女はすでにそれ以前の1965年、一般に「国民賞」と呼ばれる、国家に貢献した市民に授与される最高の叙勲MBE (Most Excellent Order of the British Empire) を授けられ、エリザベス女王から勲章を受けていた。すでに児童賞を選考し授与する側でなく、自分で賞を受賞する側にたっており、1974年にはマンチェスター工科大学から名誉フェローの称号を、1975年にはラフバラ大学から名誉博士の称号を与えられていた。児童図書館活動に寄与したとの理由で、彼女は最高の栄誉であるエリナー・ファージョン賞を1994年に授けられた。

## X 日本との接点

1976年10月、コルウェルは児童図書館研究会と出版団体の招きで日本に招待された。彼女の本が数冊翻訳されており、すでに石井桃子と親交があった彼女は、喜んで招待を受けた。結果は当人にとっても、日本の図書館界にとっても歓迎すべきものとなった。箱根での児童図書館員を囲むセミナーをはじめ、東京や関西各地での講演会の記録は日本語で刊行されている。講演会は次の言葉で始まっている。

「お話を始めるにあたって、ひとつの信念を表明しておきたいと思います……『書物は、子どもの生活と発達に欠くべからざるものであり、もっともよいものだけが子どもにふさわしい』……。」<sup>31)</sup>

セミナーは62名の応募者の中から選ばれた32名の図書館員が参加、コルウェルから『まほうのかさ』その他3つのおはなしを実際に聞いている<sup>32)</sup>。この旅行での彼女の印象は、自叙伝の一章を占めているが、そこに見られる日本の児童図書館界の歴史と現状に対する彼女の判断、および、出会った人々の人物描写は的確な

ものであり、彼女が生涯の後半にいかにこの招待を喜んでいただかが伝わってくる文章であった。

## XI 晩年

ラフバラ大学で児童図書館の授業を受けもった10年間は、新たな幸せの時期であり、彼女は熱心に若者を育てた。1977年に73歳で引退したコルウェルは、その後も休んではいなかった。ようやく時間を持てた彼女は、スコットランドとウェールズを含むイギリス全土をめぐり、各地で児童図書館員を励ますとともに、子どもたちを前にしてストーリーテリングの実演を行い続けた。『エリナー・ファージョン』翻訳のために日本から出向いた訳者に「私たちは、同じ子どもの本の仕事に携わる仲間ですよ」と笑顔で声をかけた<sup>33)</sup>とあるが、引退後も自ら「子どものために」精力的な活動を続けた。

90年代に入り視力が衰え、ようやく相手を判別できるまでとなっていたが、頭脳と精神力は衰えず、物語の本を2冊刊行していた。1993年には、ラフバラ大学からの引退後にともに暮らしていた妹のヴェラが、長い病床生活の後に亡くなった。一人残されたコルウェルは自叙伝の執筆に取りかかる。1998年にはブリティッシュ・ライブラリーでイギリス図書館協会百周年記念メダルを授与<sup>34)</sup>、その後の2000年に自叙伝を刊行、そして、2002年9月17日、98歳でその生涯を終えた<sup>35)</sup>。

コルウェルの生涯は、子どもと本につくした一生であった。両親から受け継いだその宗教心とモラルに支えられ、大きな波瀾もなく一生を独力で切り開いて「子どもと本の世界に生きて」きたこの人物の生涯は、むしろ非凡なものとして受け取ることができる。

本稿は「イギリスにおけるコミュニティ・ライブラリアンシップの展開」『図書・図書館史：図書館発展の来し方から見えてくるもの』（ミネルヴァ書房、2019年、166-167ページ）に執筆



Mar. 2023

アイリーン・コルウェル1904-2002

した内容を全面的に改稿し、人物研究の視点からまとめたものである。

### 注・引用文献

- 1) Eileen Colwell, *Once upon a Time...*, Hebden Bridge: Pennine Pens, 2000, 186p.
- 2) アイリーン・コルウェル著、石井桃子訳『子どもと本の世界に生きて：一児童図書館員のあゆんだ道』こぐま社、1994年、15ページ。
- 3) 同上書、30ページ。
- 4) 同上書、18ページ。
- 5) 同上書、32ページ。
- 6) Eileen Colwell, (2000), *op.cit.*, p.53.
- 7) セイヤーズ (William Charles Berwick Sayers, 1881-1960)。イギリスの公共図書館長。ロンドン大学図書館学校では分類法を32年間教える。ロン分類法を生み出したランガナータンは彼の教え子である。
- 8) 藤野寛之著「セイヤーズの生涯とその時代」『セイヤーズの児童図書館マニュアル』金沢文圃閣、2011年、191ページ。
- 9) Eileen Colwell, (2000), *op.cit.*, p.76.
- 10) 石井桃子 (1907-2008)。1957年村岡花子らと家庭文庫研究会を設立。1958年にかつら文庫を開設。『クマのプーさん』や『ピーターラビットのおはなし』など訳書多数。
- 11) コルウェル著、石井訳、前掲書、216ページ。
- 12) グレニーズ・サルウェイ「コルウェルさんの小さな助手として」『こどもとしゃかん』86、東京こども図書館、2000年、4ページ。
- 13) Eileen Colwell, (2000), *op.cit.*, p.94.
- 14) コルウェル著、石井訳、前掲書、152ページ。
- 15) カーネギー (Andrew Carnegie, 1835-1919)。イギリス生まれ。移民としてアメリカにわたった後、鉄鋼業で成功。図書館建築のために多額の寄付をしたことでも知られる。
- 16) アーサー・ランサム (Arthur Ransome, 1884-1967)。イギリスの児童文学作家。著書に『ツバメ号とアマゾン号』シリーズがある。
- 17) エドワード・アーディゾーニ (Edward Ardizzone, 1900-1979)。イギリスの児童文学作家・挿絵画家。著書に『チム』シリーズがある。
- 18) イェラ・レップマン (Jella Lepman, 1891-1970)。国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People) を創設。
- 19) エリナー・ファージョン (Eleanor Farjeon, 1881-1965)。イギリスの児童文学作家。著書に『ムギと王さま』などがある。
- 20) エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner, 1899-1974)。ドイツの作家。著書に『エーミールと探偵

たち』などがある。

- 21) アストリッド・リンドグレーン (Astrid Anna Emilia Lindgren, 1907-2002)。スウェーデンの児童文学作家。著書に『長くつ下のピッピ』『名探偵カッレくん』シリーズなどがある。
- 22) パメラ・トラヴァース (Pamela Lyndon Travers, 1899-1996)。イギリスの作家。著書に『メアリー・ポピンズ』シリーズなどがある。
- 23) コルウェル著、石井訳、前掲書、218ページ。
- 24) ライオネル・マッコルヴィン (Lionel Roy McColvin, 1896-1976)。イギリスの公共図書館長。1942年に発表した『イギリスの公共図書館システム』(通称『マッコルヴィン報告』)はイギリスにおける図書館政策に大きな影響を与えた。
- 25) 少年少女の家 (Boys and Girls House)。1922年に設立されたトロント公共図書館にあった児童図書館。
- 26) ジョン・メイスフィールド (John Edward Masefield, 1868-1967)。イギリスの詩人・作家。
- 27) ビアトリクス・ポター (Helen Beatrix Potter, 1866-1943)。イギリスの児童文学作家・挿絵画家。著書に『ピーターラビット』シリーズがある。
- 28) リリアン・スミス (Lillian Helena Smith, 1887-1983)。カナダの児童図書館員。著書に『児童文学論』がある。
- 29) Eileen Colwell, (2000), *op.cit.*, p.183.
- 30) アイリーン・コルウェル著、むろの会訳『エリナー・ファージョン：その人と作品』新読書社、1988年、130ページ。
- 31) E・コルウェル著、松岡享子訳『コルウェル女史講演録：子どもと本』東京子ども図書館、1978年、5ページ。
- 32) 松岡享子「日本におけるコルウェルさん」『こどもとしゃかん』86、東京こども図書館、2000年、17-18ページ。
- 33) コルウェル著、むろの会訳、前掲書、135ページ。
- 34) リズ・ウィア「ねえ、本を見ないで、お話してくれるの?」『こどもとしゃかん』86、東京こども図書館、2000年、15ページ。
- 35) <https://www.theguardian.com/news/2002/sep/25/guardianobituaries.obituaries>「Eileen Colwell: Gifted Storyteller and Creative Pioneer of Children's Libraries」(採録日：2022年9月22日)

### 参考文献

- 石井桃子「アイリーン・コルウェルの生涯を称える」『こどもとしゃかん』96、東京こども図書館、2003年、1ページ。
- 加藤節子、小関知子、小野寺信子、福本友美子、内藤直子「ありがとうコルウェルさん」『こどもとしゃかん』

ん』96, 東京こども図書館, 2003年, 18-23ページ。  
米谷優子「児童図書出版と図書館-石井桃子と図書館のかかわりから」『情報学』9(2), 大阪市立大学創造都市研究科情報学専攻, 2012年, 16-26ページ。  
松岡享子編「卓越した導き手 アイリーン・コルウェルさん: 95歳祝賀記念文集より」『こどもとしゃかん』86, 東京こども図書館, 2000年, 2-19ページ。  
松岡享子『子どもと本』岩波書店, 2015年, 総252ページ。  
E・コルウェル著, 松岡享子ほか訳『子どもたちをお話の世界へ: ストーリーテリングのすすめ』こぐま社, 1996年, 総245ページ。  
Eileen Colwell, *How I Became a Librarian*, London:

Nelson, 1956, 117p.  
“Colwell, Eileen Hilda” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2001-2003, Oxford: Oxford University Press, 2009, pp.226-227.

なお, 「注・引用文献」の人物略歴は『世界の図書館百科』(藤野幸雄編著, 日外アソシエーツ, 2006年), 『図書館人物事典』(日本図書館文化史研究会編, 日外アソシエーツ, 2017年), 『英米児童文学辞典』(定松正・本多英明編著, 研究社, 2001年)などを参考に執筆した。

(2022年11月18日掲載決定)